

佐多稲子全集

第二卷／くれない

講談社

佐多稲子全集 第二卷



昭和五十三年一月二十日第一刷発行

著者／佐多稲子

発行者／野間省一

発行所／株式会社講談社 東京都文京区音羽二―一二―二一 郵便番号一二二

電話／東京（〇三）九四五―一一一一（大代表） 振替東京八―三九三〇

印刷所／豊国印刷株式会社

製本所／藤沢製本株式会社

定価／二八〇〇円

©佐多稲子 昭和五十三年 落丁本・乱丁本はお取り替えます。 Printed in Japan

目次

鉄屑の中	230								
月にさそわれる		227							
子供	225								
柱	201								
一袋の駄菓子		176							
独り立ち	160								
牡丹のある家		144							
恐怖	127								
押し流さる		105							
*									
くれない		7							

道筋 238

山 嬖 255

哀愁 278

乳房の悲しみ 286

青春陰影 323

樹々新緑 360

前途 403

あとがき・時と人と私のこと (2)

415

注解 426

初出誌紙・発表年月 428

佐多稲子全集

第二卷

くれない

一

元日の夜の東京駅は、もう十時を過ぎていた。半分の扉をおろしたようながらんとした静けさである。元日の夜の落ちついた憩いというよりはむしろ、今朝がたまで続いたためまぐるしい忙しさに埃っぽく疲れている空気があった。高い円天井の下にかかっている大時計にさえ今夜はわびしきがある。十時五十五分の明石ゆきの改札が始まって、待ち受けたざわめきも起らず、人々はひとりひとりどこからか出て来ては、急ぎ足に入って行った。

婦人待合室を出て来た明子と岸子も自然足を急がせていた。明子の長男の行一は汽車に乗ることが嬉しくて眠気も忘れて、ホームへの階段を一人先に駆け登っ

ていた。二人の女は、ラグダ色とこげ茶とのどちらも地味な毛織のショールに肩をくるんで、小さな風呂敷包みを抱えていた。

三等車の一隅に向い合った席を取って、二人は、とうとう来たという表情で、肩をおろして笑った。行一はまだ落ちつかず、窓ガラスへ顔を押しつけて外を見たり、母の顔を仰いだりして、腰かけから垂らした黒靴の足をぶらぶら動かしていた。

「いいこと思いついたわね、とうとう来ちゃった」

「ね、いいでしょう」

岸子は深々と云って、「わたしたちもこれからうんと生活を拈げようよ。たまには旅行もいいと思うわね、そう思うでしょう」

「とても」

明子の言葉といっしょに発車のベルが鳴り出す。明子は行一の肩を叩いて、

「汽車がもう出るわよ」

「そう、もう出るの」

窓へ顔をくっ付ける行一に岸子も、

「行ちゃん汽車好きだろ」

「僕、大好きだ。僕、きょうびつくりしちゃった。も

う寝ていたのに、母ちゃんが起すんだもの」

「夏行った国府津、覚えてるかい」

「僕、よく知ってらあ。海があるんだろ」

「よしよし」

岸子が笑ってる間に明子は長男の靴を脱がせてやった。汽車はもう動き始めていた。

家の中にどこか元日らしいざわめきを包みながらも、今夜は早寝です、と言ったような静かな町の上を汽車は走った。

「いろんな正月をするね」

岸子が二人にだけ分る意味で言った。

「全く」明子は、これだけは一昨年から同じである岸子の、彼女にしては粗末な、そしてもう色の褪せた紫のコートに目を移しながら、

「私たちの生活って、どんどん変化するのね。毎年違ってるもの」

「おそろしい位、ねえ。こういう情勢の移り変りの劇しい時には思いがけない、人の変り様なんかもあって」

「ああ、さっきの待合室で逢ったひとなんかもね」

「そうよ」

人のまばらな薄暗い待合室で、滝井さんと柿村さんではごいません？　そう言って挨拶した洋装の若い女を二人は思い出すのであった。もう五年位前に明子の家に訪ねて来たことのある女だったが、まだ若いのに、はきはきと活動的で、明子は自分が友人に貰った銘仙の羽織を、彼女の仕事を支持する意味できせてやったことがあった。何度目かの左翼運動の大検挙の時に、新聞に大きく写真が出たりした。そしてこの頃は又転向の記事がくわしく出て、彼女が今はある宗教雑誌の記者になっていることも報じられていた。

華美な洋装の肩つきまで変っている。挨拶する言葉づかいにも明子は変にちぐはぐになるのだった。社の用事を兼ねて関西の親の家へ帰ってくると言う彼女には、その活動的なものだけが相変らず感じられ、それだけに変な気がするのであった。明子は思い出して、「やり手なのね。ああいう人は、つまり」

「そうなんだねえ。その人の思想がその精神的なものにまで結びついていないんだね。だから、どっちの仕事でも出来る。ねえ」

この頃はこういう人が多かった。岸子は、明子のいつもの癖で半分しか言わない言葉の意味を自分ですっ

かり言つて考え深そうな目でうなづくのであった。

汽車はときどき、幾つも電燈の点いた省線電車のホームを近々とすり抜けて走っている。明子は行一の頭を自分の膝につけさせて、ショールで身体を包んでいた。

明子はこの夏のことを思い出さずにいられない。国府津には岸子の実家の別宅がある。子供に海を見せたいという明子の母親らしい希みを聞いて岸子はるす番がいるだけのその海岸の別宅を思い出し、自分が先に行つていて、明子たちを呼んだのであった。その時は明子の夫の柿村広介も一緒であった。長女の徹子も連れていた。広介と明子にとっては、子供を連れて汽車に乗るということも始めてであり、広介がプロレタリアの文化活動をしたために起訴されて、二年近く妻子と別れて不自由な生活をし、帰つて来てから始めての旅でもあった。窓から顔をさし出す子供たちの背をそれぞれ押えながら、ときどき目を見合せて、そつと、愛情深く微笑んだりした。

今日岸子と二人きりの話の末に、ふと思ひ立つて、今またその国府津への汽車にのつてゐる。思うと、明子はふと佻しい氣持がしてくるのであった。その頃の

自分たち夫婦の生活と、この頃のそれが格別どう變つてゐるわけではない、そして、元の方がより楽しかったわけでもなかった。むしろ、その時は明子はいつにない子供連れに、広介と一緒にの氣持が妙にはずかし、中ぶらりんであったのを思い出す。夫と子供と一緒にいると、明子は知らず知らず別な自分が誰からともなく要求されてゐるようで照れるのであった。広介に子供を抱かせたりするのが厭なのである。そしてそのためにはいつか自分が女房らしく振るまつてゐる。すると今度は自分が妙にぎごちなくなる。こういう氣持は、連れが広介だけであるか、子供だけか、どちらか片方の時にはないものであった。両方が一緒だと、そのことが妙に意識されるのは何故なのであらう。

広介は、今日明子がお家を出てくる時、二階の彼の部屋で机に向つてゐた。その広介の姿が今もずつと明子の頭の隅に坐つてゐた。岸子の家で国府津ゆきを決め、行一だけでも連れてゆこうと自分の家に帰つたとき、大抵どこかへ出掛けてゐるだらうと思つた広介が珍しく居たのだった。

明子はふと別のことを思い出して、岩波文庫を開いて読んでいた岸子に言つた。「さっき東京駅でKさん

を見たわね。知らなかった？ 奥さんや子供さんを連れて」

「Kさん？ ああ知らなかった。あの人たち歩いてた？ あの人はね、元日はいつでも帝国ホテルでやるって人なの。どこかへ行ったのかな」

「あ、そう。それで。大変のどかに歩いてらした」
「あ、そうだろう」

二人はまた暫く黙った。明子は妙にその劇作家K氏が、男の子二人の手を両方に引いて歩いていたのを記憶にとどめるのであった。丁度、奥さんがK氏より一足さがったあたりに、毛皮のえり巻を持って歩いていたが、無意味にあたりを眺めながら黙って足を運んでいるその家族づれの雰囲気は明子の印象に強く残った。明子は、のどかに歩いていたという言葉で言ったのだが、明子はそういう風に見たのではなかった。それはK氏の家庭についてときどき噂などを聞いている故であったかも知れない。何だか、毛皮の大きなえり巻を持って重く歩いていた奥さんの姿が、子供を武器にして、すくなくともものびのびとゆこうとするK氏を引き止める重石^{おしり}になっている、そういうものを感じさせたのであった。勿論奥さんだけを責める気ではな

かった。一般的に、今日の家庭の持っている弱点を感じたのであった。

汽車は国府津へ着いた。

「とみさんが起きていなかったら、ことだね」

岸子は留守番の名を言って、「あの門から呼んだって聞えやしないからね。あんた、あの門飛び越える？」
「え、いいわ」

「お尻を押して上げるからね」

二人は笑いながら、起した行一の手を両方から引いて駅を出た。正月らしく松かざりのしてある駅前通りをタクシーをやって乗った。

「そら、行ちゃん、国府津へ来たよ」

「まだ海見えないね」

「ほら、もう波の音が聞える」

自動車は海岸に沿った街道を走って行った。闇にすかして見ると、海は暗く広く開けて、浜辺に波のくだけるのが白く見えた。街道筋は戸がおりて、人の通るのもまれだった。

岸子の家は街道に沿って海岸に面した小高い丘の上にあった。

「どうも御苦勞様」

自動車の扉のぱんと閉じる音が波と風の音の中でした。波の音はすぐ崖の下に打ち寄せている。

難関だと思っていた門はいいあんばいに開いた。門を入り坂になっている道を家へ向って歩いた。星が無数に高い空にきらめいている。丁度英国の写真で見る、蕨のからんだこちんまりした洋館が、芝生の庭を前にして彼女たちの前に現われた。

「ほら、国府津のお家。おぼえてるでしょう」

「うん。あ、僕知ってる」

行一の声が夜更けの空の下で細く少し慄えながら透った。

るす番のとみさんはすぐ起きた。家のなかに電燈がついて、まあまあという声が先にした。そして鍵がカチャカチャなって声と一緒に扉が開いた。

「まあまあ、遅いのによく」

「急に思い立って来たのよ。寒いのに起して気の毒だったわね」

「いいえ、どういたしまして、ひとりでございますから、もう早く床に入ってしまうすんでございますよ」

五十近いとみさんは胸をかき合せながら何かとしゃ

べりつつけて、明子たちを招じ入れた。行一は自分の家とは大分違うその部屋がやはり珍しく、もう小走りに部屋を歩き廻って、夏、見知っている玩具のような人形の卓上鈴だの、鳩時計だの、昔風な帆船の置物だのにひととおりの旧交をあたたためて廻った。

岸子は、

「もう今夜は遅いから、このまますぐ寝ますからね。

お茶だけ一杯吞まして下さい」

「はあはあ、よろしゅうございます」

とみさんが台所へ出てゆくと、岸子は明子をかえりみて笑った。

「どう？ 来てよかった」

笑いながら明子は黙ってうなずいた。明子はやはりこの家のすっかり外国風なのに、他所へ行った珍しい気持とあわただしさのまま来てしまった落ちつきなさで、ほかんとしているのだった。

「冬の海っていいものね。私ほんとに正月になると、どこか違った所に行きたくなってる」

明子はそうとんちんかんに、出掛けに言ったことをまた言った。だが、言葉とは少し違った、ある淋しさが彼女の胸に拡がっていた。広介の、ちょっと唇を曲

げていた顔がその淋しきの中に浮んでいた。すると明子の淋しさは、妙に荒れてくるのであった。

二

行一の声が新鮮に、まっ暗い部屋の中で響いた。

「母ちゃん」

「うん。もう起きたの」

雨戸の隙間から白い光が見えている。トコトン、トコトン、太鼓の音が外で鳴りつづけている。あ、あの太鼓の音をもう大分前から聞いているな、と明子はいきなり起きた。寝室の岸子は、外へ向っている窓からあの太鼓に悩まされたのではないかしら、と明子はすぐ思った。それは岸子に対して明子の或る感情が働いていて、そう思わせるのであった。おやすみ、をお互いに言って、別々になる時に、明子はこの家の中で岸子をひとりにするのが、明子自身涙っぽくなるように胸につかえるものがあった。岸子がいま行き合っている自分の境遇を、如何なる性質のものはつきり知っていることを思えば、それは痛ましいとか、気の毒であるとかいう性質のものではなかった。だが然し人一

倍感情の豊かな岸子が、この家に来て、日頃の思いを掻き立てられないわけはないのであった。そういう感情の残るこの家に夏の時明子夫妻を呼んで呉れたことや、今日また思い立って来たことやについても、明子はやはり岸子の気持を察しないわけにはゆかないのであった。

岸子はよく寝ただろうか？

窓の雨戸を開けると、みかん畑になっているうしろの山からきびしい空気が流れ込んで来て、晴れた空であった。そこだけは畳の敷いてある部屋で、大きな鏡台などがおいてある。明子はふとんをあげた。

行一はもう台所の方でとみさんと話している。明子が出てゆくと、とみさんは食事の支度をしていた。

「おはようございます。よくおやすみになりましたか」

「おかげ様で、いいお天気ですね」

「えええ、いいあんばいでございますよ。お雑煮をひとつ差し上げようと思ひましてね。どんなに出来ますか」

海は青々と陽に輝いている。明子はガラス越しの日光を楽しみながら椅子に腰かけて、白く動いている波

を眺めた。トコトン、トコトン、太鼓はひっきりなしに鳴って、子供たちの声も下の街道からつたわってくる。太鼓の音は如何にも海への正月らしい気分であった。行一は芝生へ出て、大人のように上着のポケットに両方の手を突込んで海へ向って立っていた。

岸子が、まだ眠いという顔をわざと子供っぽく強調して、まぶしそうに目を細めて寝室から出て来た。

「もう起きたの、いいお天気ね」

「おはよう。太鼓がうるさかかった」

「うん、少々」

「散歩して見ましょうね。あとで」

「いいわね。行きましようよ。どう、こっちは少しは暖かい？」

「さあ、まだわからない」

明子が笑うと、いやだ、この人、と岸子は声高く笑って、とみさんと呼びながら台所へ入ってゆく。機嫌のいい時の岸子の声は円く透きとおって響いた。

「母ちゃん、海へ行ってみよう」

行一が呼んでいる。明子は下駄をはいて外へ出て行った。

街道の煙草屋の前で、やぐらの上で子供たちが太鼓

を叩いているのがすぐ見えた。みんな漁師の家の子供たちであろう。正月らしく紺緋の筒袖をきて、股引をはいて、十人程で大太鼓、小太鼓を合せていた。波の音はひっきりなしに響いていた。まっ直な家並みに、国旗が出て、黒紋つきの男たちも歩いていた。

明子は漁師たちの家と家との間を抜けて砂を踏みながら浜へ出て行った。男たちの酔った唄声が聞えて来る。浜に引上げた漁舟の中で酒盛らしい。如何にも海の男たちの声を思わせて広い浜辺の中を聞えて来る。

舟には注連縄しづなわがかけてある。一人の声が歌い上げると、句切り句切りで大勢が手を拍って、ヨイヨイと合せた。海の風はきびしく明子の頬を吹いた。

「父ちゃんと、この辺で泳いだのね」

行一に呼びかけると、砂を両手で盛り上げて撫でていた行一は、嬉しい時の羞しげな笑いで母を見上げた。

その日は終日好い日和であった。岸子も一緒に、うしろの山へ、線路を越して登って行ったりした。岸子は蔓もどきの赤い実を、枯草の中に見つけて広介への土産にしようと折った。明子が言った。

「以前は、外から持って行く花なども差入れられたん

「だけど」

「そうね、本当にくやしい。花を差入れたって、自分で氣にいったのを入れるわけではないんだからね」

二人が、「差入れ」のことを言っているのは、岸子の夫の中沢のことを思ってたのであった。岸子が夫と別れた生活をしなければならなくなってからもう三年になっていた。そして、去年の暮、正月も近づいた二十日過ぎに、中沢は街頭から検挙されて今は刑務所にいた。そして、岸子が中沢と別々になる直前に、二人で来たのが、この家であったのだ。明子はそれをよく知っているのであった。この家の帰りがけに東京駅で別々になったきり、中沢は岸子との自分たち二人の家に帰って来なくなったのであった。

暮れるまで続いていた太鼓の音もやんだ。行一を寝かせてしまうと、二人は居間で、暖炉に松の木の薪を焚きながら話し込んだ。卓の上には、とみさんがお隣りから貰って来たという早咲きの白い梅が、埃のつかない清浄さで匂っていた。話は自分たちの作家としての生活に、いつものように入っていくのだった。

「あなたは、この間随筆で、夫婦とも作家である場合のことを書いてプロレタリア作家の場合にはその困難

さは解決がある、と言っていたけれど、具体的な問題ではあれで済まないものがあるわね」

そう言って、口先に淋しげな笑いを漂わしながら、明子は、岸子を見るその目には、自分の言おうとする意味を籠めていた。岸子は腕組みをし、ふん、とうなずいて、

「ああ、そうかねえ、あれでは解決をし過ぎる？」

「あなたの言う言葉では問題はないのだけど。私たちは勿論お互いにどちらも成長することを希っているし、そのように努めているわね。だけど具体的にはいرونなことがある」

「たとえばどんなこと」

「些細な例でおかしいけど、広介が誰かと討論している時には、私は黙ってお茶を汲んでいるわね。黙ってお茶を汲まざるを得ないのよ。何んだか亭主と一緒に言うようでおかしいのよ。一緒の時にはどうしても、外から見れば女は女房だと言う気があるでしょうからね」

「ふーん。そんなもんかね」

「こたわっているのがいけないと言えはそれまでだけど、それは然し實際よ。全然仕事が変わっていれば、勿